

歐洲の戰雲も愈々迫つて來たらしく、食堂の話題は之れで持ちきり。

9月24日（土曜日）

早朝、船長と無電局長は船橋と犬吠崎とを呼び出して、無線方位を決定したので、船の海上位置が判明した。豫想よりも少々南方へ船は流れてゐたらしい。10時、右舷に野島崎が見えた！

颱風は速度が鈍く、こちらへ近づいて來ないうちに、船は意外に早く東京灣に入つて、15時に横濱港外に着。16時に第10號浮標につながれた。自分は、まもなく、岡野氏と共に川崎汽船のランチで上陸し、正規の通り税關の検査を受け、18時、横濱驛發、新橋驛で岡野氏と別れ、19時マンペイ・ホテルに入つた。

前後3ヶ月餘にわたる慌だしい歐米旅行も茲に終つた。横濱發から歸着まで總計97ケ日、そのうち53ケ日を船の中に暮したわけである。米大陸は“す通り”にも等しい往復であつたし、歐洲で送つた日數も決して長いものではなかつたが、それでも、久しくあこがれてゐた中央ドイツのチウリングヤを一週間も巡歴したことゝ、北歐の涼しく楽しい夏を旬日にわたつて過した思ひ出は、永く盡きないことゝ思ふ。（終）

編輯室より

漸く春暖まる頃となり、昨夏物故した小山理學士の遺稿として天界に「ミラ型變光星に就いて」、銀河には「ぎよしや座く星に就いて」を掲げ、本邦に於ける變光星專攻の故學士の追福を祈る事とした。

新役員の顔觸れが紹介された、本會の事業も大いに期待がかけられてゐる際會員と共に折角の御協力を切望する。

本會の毎月の例會も下記の如く各地で盛況を呈する事であらう。東亞に何かしら新らしい機運が漲りつゝあるの時。（P. O 生）

各地支部の例會豫定

京 都	（京都市近衛通 樂友會館）	毎 月	第 1 月 曜
大 阪	（大阪市四橋 電氣科學館）	同	第 1 土 曜
神 戸	（神戸市元町1丁目 ビーハイヴ）	同	第 2 金 曜*
岡 山	（岡山市門田18 水野氏邸）	同	第 2 土 曜
倉 敷	（倉敷市 倉敷天文臺）	同	第 1, 第 3 土曜

* 七月は第1金曜

昭和13年度總會記

本會の昭和13年度總會は最初昨年12月東京に於て開催される筈であつた處、種々の都合で延期され去る1月7日大阪市立電氣科學館で開かれた。

この日16時より同館7階休憩室で座談會を開く。當日は寒氣殊に厳しかつたが各地より熱心な會員が參集、眺望よき休憩室にて歡談した。

次で17時より6階天象館にて山本一清博士の「本年度中の天文現象」と題する講演があり、同講演を中心としてプラネタリウムの特別演出があつた。

今回の演出時間の關係上同博士の講演を中途で惜くも中止し18時より同館地下階食堂で總會に移る。先づ宮森大阪支部長より主催地代表として挨拶があり、西森經理部長より昭和13年度會計報告、大口事業部長より事業報告あり、次で現役員の任期満了せるため改選を行ひ、新に會長、副會長、理事の決定を見ず。而して新理事會の提案により會則の一部變更(會計監督の項削除)が諮られ満場一致で承認された。以上で議事を終り一同晚餐を共にしつゝ、先に時間の關係上中途で切れた山本博士の講演を聞く。次で着席順に一同自己紹介をなす。食後懇談にうつり遠く滿洲より歸省された河合孝一氏が滿洲の近況を語られ滿洲國歌及滿鐵行進曲等を唱はれ、次で五藤齋三氏より「日本に於ける光學工業の發達」と題する講演があり豊富な體驗にもさづいて面白く語られた。中でも日露海戰に於て我海軍の首腦者が逸早く新銳光學兵器を採用したため之がごんなに戰局を有利に導いたか、又歐洲大戰當時の我光學工業界の狀況やその後の發達振り、殊に最近事變を契期として我國の光學工業の非常な躍進振り等を述べられ、又我國反射望遠鏡界の開拓者中村要氏の思出や研究初期の同氏の逸話を興味深く語られた。次いで笹部進氏が美聲でテナリ獨唱され一同思はず聞きされる。かくて同氏の獨吟を最後に和氣霽々たる内に本年度の總會を終了した。出席者40名。〔津久井生〕

岡林滋樹氏は倉敷へ赴任

さきに倉敷天文臺では小山理學士の急死により觀測陣は淋しさを感じたが、今回原山本水野木邊諸氏の協議により、神戸の會員岡林滋樹氏を新しく臺員として迎えることとなり、同氏は2月末赴任する。岡林氏は1936年に射手座の新星を發見し、米國から金牌を獲た人であり、今後やはり倉敷では山本臺長監督の下に主として變星の觀測研究をする筈である。

各地の
た よ り

大 阪 支 部 だ よ り

□銀河第3巻第1號目次(年6回毎奇數月5日發行)

表紙「アメリカ・インディアンの星物語り」ハイデンプラネタリウム
 壁畫、口繪「昨年二月2日のカノーパス(密着寫眞) 伊達撮影、
 扉「Twinkle, Twinkle, Little Star」, 卷頭「謹賀興亞新春」, 「觀測
 の生理學」(3) 江原學士, 「反射鏡の特質と使用法」(3) 伊達, 「兎の
 星々」宮森作造, 「昨年十二月3日の大流星」枝川忠義, 「天驛人

語」, 「紋章の天文學」山崎幸夫, 「東日會館の天文館を見て」美美子, 童話「十三夜の月
 と兄妹」A・A生, 「本年上半期のユリウス通日表」, 「一・二月の天象欄」, 編輯後記, 附
 録「Star-Legends, among the American-Indians (1) 全52頁, 英文欄12頁, 堂々の内容。

□支部報(天文研究會回報と改題)第48・49號 二月5日附發行, 内容は會告
 の他, 天文學界の近況天象急報, 或ひは論文や書籍の紹介等隨時發行となる。

大阪プラネタリウムだより

□巷間に「長期建設」の強い聲を聴きつゝ, こゝ四ツ橋科學館も相當の入場者
 を見て來た。そして昭和13年は暮れ, 新春を迎へた。

□去る日の入場者中に, 蒙疆聯盟國の高位顯官が陸續と來館されたのには大い
 にハリキツた次第であるが, 殊に徳王の一行を11月6日に迎へた時の光榮は今
 も印象に新たである。王は「巧奪天工」の名筆跡を残して感慨の面で去られ
 た。或は又, 戦火既に治つた北京政府より, 又維新政府より要人等相次いで來
 訪し, プラネタリウムに感嘆の聲を揚げ, 親日の笑顔を残して行つた。其他フ
 イリビンの大學總長の一行あり, 滿洲國の高官の視察團あり, さすが, 天上に
 國境なき如く, 「星の劇場」には何時も和やかな來觀風景を繰返へしてゐる。或
 は, 度々の白衣の勇士の參觀を迎へては一般客も暖い上席を譲り, 慰安の一時
 を共に楽しんでゐた。

□11月10日から月末まで開かれた「天文に關する展覽會」は天文協會大阪支部
 後援のもとに, 山本博士の御指導と近地の珍稀貴重な出品者の御厚意と共に,
 盛況そして有意義に過された。この展覽會はプラネタリウムの構造や價值を識
 らしめ, その天文資料とを陳列し, 加ふるに支部後援の珍貴な天文史料を別室

に置いたもので、史料中間長浜の蔵書資料は殊に識者の注目を惹いた。

□1月7日、延期中の協會總會を、館内で開催した(詳細既報)。今後こうした協會と科學館との提携事業は益々強化實行されることを希望してゐる。プラネタリウムを通じての天文ファン、即ちアマチュアも相當生れて來たこの頃とて、科學館でも大いに意氣込んでゐる。

□四ツ橋と云ふ處は、昔の大阪天文の發祥地で、因縁は深いのであるが、今は烟に包まれ、夜景は殊に明るいので、屋内の星は眺められても、天の星々の影薄いのは實に情けない。然し塔上での星眺めは天頂附近は美しい。本年初のコデク・ペルテア彗星も早速觀望し得た。新春早々西村製作所より10種反射機を出品されたのには感謝に堪えない。本館には嘗て日本光學會社より、10種屈折機を出品されてゐるので、こゝに代表的な兩様式望遠鏡が揃つて、太陽黒點、變光星、掩蔽觀測などは出来るだらう。黒點や月や遊星は一般にも公開する。追々設備も整へる豫定である。これで目下プラネタリウム系の館員を募集中である。(高城)

函館支部だより

時局多端の折益々隆盛大慶に存じます。當函館「星の會」は昭和12年1月發會し、以來會員相互の親睦と天文普及の爲盡力致して参り、會員數も増し現在20名に達しました。毎月例会を催し、今年度より會報の配布に至りました。又函館タイムス社の依頼により毎月2回新聞に天文記事掲載をなし、一般に天文が普及されて居ります。

會員は殆んど天文初歩の若年の者ばかりであります。今後の期待は大なるものがあると思ひますし、今後の發展には協會の御賛助と御指導を仰ぎたいと存じ切にお願い致す次第であります。

函館市宮前町七番地 田村合名會社内

函館星の會

委員 廣 田 藤 吉

〃 田 村 正 三

〃 今 井 正 治